

浄土三経往生文類の研究

巖城孝憲

序

『教行信証』（『顕浄土真実教行証文類』）を撰筆ののち、親鸞は、いわゆる仮名聖教を執筆する時期に入られる。すでに和讃は76歳頃から書き始められたようであるが、『教行信証』撰筆ののち、83歳以後、数年間における執筆は、ほとんど集中的になされている。すでに指摘されているように、関東の門弟たちの間におこった思想の混乱は、善鸞を関東へ下向させて一層混乱していったようである。このことは、『歎異抄』第2章の背景にもなっていることが明らかにされており、「往生極楽の道」と言われる問題、すなわち、救いの根幹にかかわる問題であったと言われている。宗祖はこの時期の数年間に、あらためて、平易な日本語で、仮名聖教を次々と執筆され、あるいは、聖覚の『唯信鈔』などの聖教を、何回も筆写して送ったりされているのは、関東の門弟たちのために、非常に苦慮された結果であろうと言われている。『御消息集』等の書簡類においても、懇切丁寧に問答のやりとりが記されているのを見ても、同様である。宗祖の仮名聖教は、『教行信証』の格調の高さとはとても比較できないと言われているのは当然ではあるが、しかし、思想の次元を異にすることはありえず、思想の深さは同じくしていると考えられる。関東の門弟たちへの直接的な教誡であり、平易に丁寧に繰り返し繰り返し肝要のことを、情感豊かな日本語表現で書かれており、そのことは、『教行信証』を学ぶ者にとっては、難解な『教行信証』の思想を解明するための示唆にとむ文章であるように思われる。

仮名聖教など代表的な著作を、執筆年代順に記すならば、次のようになる。

- 親鸞 76歳 浄土和讃、高僧和讃
- 77歳 唯信鈔文意
- 80歳 浄土文類聚鈔(別説あり)
- 83歳 尊号真像銘文、浄土三経往生文類(略本)
- 84歳 入出二門偈
- 85歳 一念多念文意、浄土三経往生文類(広本)、如来二種回向文

このたび、『浄土三経往生文類』によって『教行信証』の思想を解明することを念願とし、すでに著された諸師の最近の研究を参照させていただきながら、進めていきたいと思う。

幡谷 明『浄土三経往生文類試解』(1992年、真宗大谷派宗務所教育部)

紅椽英顕『浄土三経往生文類(広本)講讃』(1995年、永田文昌堂)

高田慈昭『浄土三経往生文類講述』(2003年、永田文昌堂)

略本(83歳著)と広本(85歳著)の相違は、すでに指摘されている通り、広本が往還二回向を骨格としている点であり、難思議往生における還相回向の記述が、後に執筆された広本には付加されていることである。宗祖によって広本が表わされた後にはすぐに、『如来二種回向文』という著作も著わされ、もっとも単純明解な形で、往還二回向論が記述されているのをここにも見ることができる。更に、もう一点大きな違いがあり、それは、往相回向のもとに、「真実の行業」「真実信心」「真実の証果」を掲げ、まったく『教行信証』の各巻の標挙の願文と同様に、行・信・証を記していく。しかし、広本に先立っている略本には、信・証しか記されてなく、行相当の第17願とその成就文が記されていないのは、広本との大きな違いである。

ここでは、広本の記述に従って論を進め、『浄土三経往生文類』本文には下線を施すことによって他からの引用文と区別することにしたい。親鸞は、広本では、三経を原文で引用して読みがなをすべてをいわずに右に書き記しておられる。この点も、略本との相違点であるが、ここでは、本文を、その読みがなに従って書き下し文にして、表記したいと思う。以下において、『大経』及び『如来会』という表記は、宗祖の著作における表記に従っている。尚、段落の見出しは、幡谷明著『浄土三経往生文類試解』を参照させていただいた。

大経往生 総論

大経往生といふは、如来選択の本願、不可思議の願海、これを他力とまふすなり。これすなわち念仏往生の願因(略本のみ左訓 たねといふ)によりて、必至滅度の願果をうるなり。現生(略本のみ左訓 このよをいふ)

に正定聚のくらゐに住して、かならず真実報土にいたる。これは阿弥陀如来の往相回向の真因(左訓 まことのいんなり)なるがゆへに、無上涅槃のさとりをひらく、これを『大経』の宗致(左訓 むねとすとなり)とす。このゆへに大経往生とまふす、また難思議往生とまふすなり。

I「これすなはち念仏往生の願因によりて」(因) — 「必至滅度の願果をうるなり」(果)

II「現生に正定聚の位に住して」(因) — 「かならず真実報土にいたる」(果)

III「これは阿弥陀如来の往相回向の真因なるがゆゑに」(因) — 「無上涅槃のさとりをひらく」(果)

Iにおいては、「念仏往生の願」(因)・「必至滅度の願」(果)いづれも願名に基づいており、第18願を因として、第11願の果を得ることを明かし、IIにおいては、第11願そのものの因果、IIIにおいては、IとIIを合して、「無上涅槃のさとりをひらく」の結論を導く。「これは」とは、直前のIIの第11願の文を指して言うのか、それとも、この段落の筆頭の主語、「如来選択の本願、不可思議の願海」を指すものであろうか。「これは阿弥陀如来の往相回向の真因なるがゆゑに」とあるのであるから、本願を意味している指示代名詞であると思われるが、そうではない。「これは」は、やはり直前のIIの文を指す。つまり、「証卷」最初に、「(無上涅槃は)すなはちこれ必至滅度の願より出でたり」とあるように、「正定聚に住するがゆゑに、必ず滅度に至る」のであるから、「阿弥陀如来の往相回向の真因」とは、第11願なのである。

ここに、「現生に正定聚の位に住して」とある「現生に正定聚」という語が目される。『教行信証』「信卷」の「現生に十種の益を獲」^[註1]という言葉に「現生」の語は現れ、「十には正定聚に入る益なり」とあり、あるいは、他の仮名聖教に数回「現生に」とあるが、「現生不退」「現生正定聚」という術語そのものは、宗祖の著作においては現れていないようである。この『浄土三経往生文類』のこの箇所が唯一「現生正定聚」の表現である。先に記したように、略本に左訓が「このよをいふ」と、ほどこされている。

「現生正定聚」を言い表わす言葉を仮名聖教中に探してみるならば、まず、『一念多念文意』には、第18願成就文中の言葉「諸有衆生 聞其名号 信心歓喜 乃至一念 至心回向 願生彼国 即得往生 住不退転」を釈する文の中に、「ときをへず、日おもへだてぬなり」「とき・日おもへだてず」という言葉がある。

「即得往生」といふは、即は、すなわちといふ、ときをへず、日おもへだてぬなり。また、即はつくといふ、そのくらゐにさだまりつくといふことばなり。得は、うべきことをえたりといふ、真実信心をうれば、すなわち、无碍光仏の御ころのうちに攝取して、すてたまはざるなり。撰はおさめたまふ、取はむかへるとまふすなり。おさめとりたまふとき、すなわち、とき日おもへだてず、正定聚のくらゐにつきさだまるを、往生をうとはのたまへるなり。^[註2]

同じく『一念多念文意』には、「現生正定聚」を言い表わす言葉として、「このよのうちにて」という言葉が見られる。

「如」はごとしといふ。ごとしといふは、他力信樂のひとは、このよのうちにて不退のくらゐにのぼりて、かならず大般涅槃のさとりをひらかむこと、弥勒のごとしとなり。^[註3]

同じく、『愚禿鈔』には、

本願を信受するは、前念命終なり。「すなわち正定聚の数に入る」文 「即時入必定」文 「また必定の菩薩と名づくるなり」文

即得往生は、後念即生なり。他力金剛心なり、しるべし。すなわち弥勒菩薩に同じ。大経には「次如弥勒」と言えり。文 ^[註4]

同じく、『尊号真像銘文』には、

「即横超截五悪趣」といふは、信心をえつればすなわち横に五悪趣をきるなりとしるべしと也。即横超は、即はすなわちといふ、信をうる人はときをへず日をへだてずして正定聚のくらゐにさだまるを即といふ也、横はよこさまといふ、如来の願力なり、他力をまふすなり、超はこえてといふ、生死の大海をやすくよこさまにこえて無上大涅槃のさとりをひらく也。^[註5]

龍樹菩薩御銘文 『十住毘婆娑論』に曰く。「人能念是仏 無量力功德 即時入必定 是故我常念 若人願作 仏 心念阿弥陀 応時為現身 是故我帰命」文 「人能念是仏無量力功德」といふは、ひとよくこの仏の無量の功德を念ずべしとなり。「即時入必定」といふは、信ずればすなわちのとき必定に入るとなり、必定に入るといふは、まことに念ずればかならず正定聚のくらゐに定まるとなり。^[註6]

龍樹菩薩の『十住毘婆娑論』「易行品」において見いだされる「即時入必定」という言葉が、宗祖の「現生正定聚」の思

想に決定的な言葉となったことが言われている。「正信念仏偈」の龍樹菩薩を讃嘆する言葉に、「憶念弥陀仏本願自然即時入必定」(弥陀仏の本願を憶念すれば、自然に即の時、必定に入る)とあり、そのご自釈の文(『尊号真像銘文』)にもまた、「成等覚証大涅槃」というのは、「成等覚」というのは、正定聚のくらいなり。このくらいを龍樹菩薩は「即時入必定」とのたまえり。曇鸞和尚は、「入正定之数」とおしえたまえり」とある。niyata-samyaktva というサンスクリット語が「正定聚」と訳される語であるが、本来は「正性決定」という位を意味するから、原語には「聚」に対応する語はなく、補って訳された言葉である。「正定之数に入る」「定聚の数に入る」という言葉の「数に入る」という表現は、その中であって「一人としての位に定まる」ことを意味し、はからずも賜わることができた位をそのように表現している。「必獲入大会衆数」(必ず大会衆の数に入ることを獲)とは、「菩薩の大会衆の一人としての位に定まる」という意味である。先にも記したが、第18願成就文中の言葉「諸有衆生 聞其名号 信心歡喜 乃至一念至心回向 願生彼国 即得往生 住不退転」のおいても、すでに「即得往生 住不退転」の語によって、「即」「すなわち」ということが明かにされていた。宗祖の『正像末和讃』にも「即」「すなわち」という表現が見られる。

真実信心うるゆえに すなわち定聚にいりぬれば
補処の弥勒におなじくて 無上覚をさとるなり^{〔註7〕}

真実の行業

この如来の往相回向につきて、真実の行業あり。すなわち、諸仏称名の悲願にあらわれたり。称名の悲願は、『大无量寿経』にのたまわく、「設ひ我、仏を得むに、十方世界の無量の諸仏、悉く咨嗟(左訓 よろづのほとけにほめらるるなり)我が名を称せずば正覚を取らじ」と。文

称名信楽悲願成就文。『経』に言わく、「十方諸恒沙の諸仏如来、皆共に、无量寿仏の威神功德不可思議なるを讃嘆したまふ。諸有衆生、其の名号を聞きて信心歡喜して乃至一念せむ、至心回向したまへり、彼の国に生まれむと願すれば、即ち往生を得、不退転に住せむ、唯、五逆と正法を誹(左訓 そしり)謗(左訓 そしる)するを除くと。文

第17願を掲げ、次に第17願成就文と第18願成就文までも続けて掲げている。『教行信証』『行巻』においては、『无量寿経』『如来会』『大阿弥陀経』『平等覚経』の願文を出し、偈文も出して証左とするが、当然のことながら、そこに第17願成就文に続けて第18願成就文は提示されない。すでに序において述べたことであるが、略本には、行については記されていない、上記第17願と成就文の引用がない。『如来二種回向文』は、広本の後の執筆であり、書名が示す通り、往還二回向そのものを、関東の門弟あてに、簡潔に明確に述べており、この聖教には、行について記されており、第17願が示される。

『无量寿経優婆提舍願生偈』に曰く。「云何が回向する、一切苦悩の衆生を捨てずして、心に常に作願すらく、回向を首と為て大悲心を成就することを得たまへるが故に」と。文

この本願力の回向をもて如来の回向に二種あり。一には往相の回向、二には還相の回向なり。往相の回向につきて、真実の行業あり、真実の信心あり、真実の証果あり。真実の行業といふは、諸仏称名の悲願にあらわれたり。称名の悲願、『大无量寿経』にのたまはく、「設我得仏、十方世界無量諸仏、不悉咨嗟称我名者、不取正覚。」文^{〔註8〕}

これは広本と同様に、「往相の回向につきて」と言って、真実の行業あり、真実の信心あり、真実の証果ありと、真実の行・信・証あることを、まず標挙している。

真実の信心

また真実信心あり、すなわち念仏往生の悲願にあらわれたり。信楽の悲願は、『大経』にのたまわく、「設ひ我、仏を得たらむに、十方の衆生、至心信楽して、我が国に生まれむと欲ふて乃至十念せむ、若し生まれずば、正覚を取らじと。唯、五逆と正法を誹謗せむを除かむ」と。文

同本異訳の『无量寿如来会』に言はく。「若し我、无上覚を証得せむ時、餘の仏刹の中の諸有の有情類、我が名を聞き已りて、所有の善根信心回向して、我が国に生まれむと願じて乃至十念せむ、若し生まれずば、菩提を取ら

じと、唯、無間悪業を造り、正法及び諸聖人を誹謗せむを除かむ」と。文

『大経』第18願、次いで『如来会』第18願が提示される。略本にしても広本にしても、親鸞は、特に『如来会』の扱いを非常に大事にされている。それは次の「真実の証果」第11願と成就文の扱いにおいて際立っているが、ここでも既に、併記されている。『如来会』第18願文の意義は、「我が名を聞き已りて」という言葉があることであろう。この言葉が、願成就文において「一念浄信」の言葉となっていく。

そして更に、『如来会』第18願成就文は、『如来会』第11願成就文とともに、非常に大切な意義が言い表わされており、それは「真実の証果」に属することであるがゆえに、ここの「真実の信心」の所には引文されてはいない。

『一念多念文意』には、この『浄土三経往生文類』の「難思議往生」の部分の記述と全く対応関係している記述が見出される。『一念多念文意』の奥書には「庚元二歳丁巳二月十七日 愚禿親鸞 八十五歳 書之」とあり、『浄土三経往生文類』(広本)の奥書には、「庚元二年三月二日書写之 愚禿親鸞 八十五歳」とあることから、前後関係が分かるが、『浄土三経往生文類』は略本があって、2年前の八十三歳のときに執筆されて、その信・証の部分から自ら注釈されたのが『一念多念文意』のその箇所の文章である。同じ時期の執筆であることから、流れが同一であることは当然であることかもしれない。行・信・証ではなく、信・証で語られていることから、広本ではなく、略本の記述に同じであり、かなりの長文であるので、便宜上、(1)信・(2)証経文証・(3)証釈文証という3分割して、しるべき箇所において引用し検討したい。まず、(1)信に関する箇所であるが、『一念多念文意』には、ご自釈で次のようにある。

『無量寿経』の中に、あるいは「諸有衆生、聞其名号、信心欢喜、乃至一念、至心廻向、願生彼国、即得往生、住不退転」ときたまへり。「諸有衆生」といふは、十方のよろづの衆生とまふすところなり。「聞其名号」といふは、本願の名号をきくとのたまへるなり。きくといふは、本願をききてうたがふころなきを、聞(左訓きくといふ)といふなり。またきくといふは、信心をあらわす御のりなり。「信心欢喜乃至一念」といふは、信心は、如来の御ちかひをききてうたがふころのなきなり。欢喜といふは、歡はみをよろこばしむるなり、喜はころよよろこばしむるなり、うべきことをえてむずと、かねてききよりよろこぶころなり。乃至は、おほきおも、すくなきおも、ひさしきおも、ちかきおも、さきおも、のちおも、みなかねおさむることばなり。一念といふは、信心をうるときにきわまりをあらわすことばなり。「至心廻向」といふは、至心は、真実といふことばなり、真実は阿弥陀如来の御ころなり。廻向は、本願の名号をもて十方の衆生にあたへたまふ御のりなり。「願生彼国」といふは、願生は、よろづの衆生、本願の報土へむまれむとねがへとなり。彼国は、かのくにといふ、安楽国をおしへたまへるなり。「即得往生」といふは、即は、すなわちといふ、ときをへず日おもへだてぬなり。また、即はつくといふ、そのくらゐにさだまりつくといふことばなり。得は、うべきことをえたりといふ、真実信心をうれば、すなわち無碍光仏の御ころのうちに撰取(左訓おさめとりたまふとなり)して、すてたまはざるなり。撰は おさめたまふ、取はむかへるとまふすなり。おさめとりたまふとき、すなわち、とき日おもへだてず、正定聚(左訓ううじやうすべきみとさだまるなり)のくらゐにつきさだまるを、往生をうとはのたまへるなり。^[註9]

真実の証果

また真実証果あり、すなわち、必至滅度の悲願に、あらわれたり。証果の悲願、『大経』に、のたまはく、「設ひ我、仏を得たらむに、国の中の人天、定聚に住し、必ず滅度に至らずば、正覚を取らじ」と。文

同本異訳の『無量寿如来会』に言はく、「若し我、成仏せむに、国の中の有情、若し決定して等正覚を成り、大涅槃を証せずば、菩提を取らじ」と。文

『無量寿如来会』に言はく、「他方仏国の諸有の衆生、無量寿如来の名号を聞きて、能く一念の浄信を発して、歡喜愛樂せん、所有善根回向して、無量寿国に生まれんと願ぜば、願に随うて、皆生まれて、不退転乃至無上正等菩提を得んと。五無間と正法を誹謗し、及び聖者を誹ぜんをば除かん」と。

必至滅度証大涅槃の願成就の文、『大経』に言わく、「其れ、衆生あつて彼の国に生まれむ者、皆悉く正定の聚に住せむに、所以は何んとなれば、彼の仏国の中には諸の邪聚及び不定聚はなければなり」。文

また『如来会』に言はく、「彼の国の衆生と、若し当に生まれむ者は、皆悉く無上菩提を究竟し、涅槃の処に到ら

む、何を以っての故に、若し邪定聚及び不定聚は、彼の因を建立せることを了知すること能わざるが故なり」と。

文 以上抄要

この真実の称名と、真実の信樂をえたる人は、すなわち正定聚のくらゐに住せしめむとちかひたまへるなり。この正定聚に住するを等正覚をなるともたまへるなり。等正覚とまふすは、すなわち補処の弥勒菩薩とおなじくらゐとなると、ときたまへり。しかれば『大經』には「次如弥勒」とのたまへり。

真実証を顕らかにする經文証として挙げられるのは、まず『大經』第 11 願であり、次いで『如来会』第 11 願である。『大經』第 11 願の「住定聚 — 必至滅度」が、『如来会』においては「成等正覚 — 証大涅槃」という全く未曾有の言葉をもって表現されていることに、宗祖は深い感動をもって、ここに『如来会』を引文併記されていると思われる。次いでまた『如来会』から第 18 願成就文が示され、ここには「一念淨信」と「得不退轉乃至無上正等菩提」という表現がある。そして、『大經』第 11 願成就文提示ののちには、結論的に『如来会』第 11 願成就文が、「彼の国の衆生と、若し当に生まれむ者は、皆悉く無上菩提を究竟し、涅槃の処に到らむ」と述べて、結論が示される。これは、『大經』第 11 願成就文の「其れ、衆生あつて彼の国に生まれむ者、皆悉く正定の聚に住せむ」という表現を、更なる深みにおいて「凡夫が仏となる」法を、真実証を顕らかにする經文として明かしたものである。

『教行信証』『証卷』においては、『大經』第 11 願、『如来会』第 11 願、『大經』第 11 願成就文、そして『大經』『上卷』から「自然虚無の身、無極の体」の文を引いて正定聚の存在を明らかにし、そして、『如来会』第 11 願成就文を提示して經文証となされている。

この広本のすぐ後に著わされた『如来二種回向文』は、極めて簡潔な小論であるが、そこにおいても、『大經』第 11 願に次いで『如来会』第 11 願が併記され、「成等正覚 — 証大涅槃」の意義が明されているのを見る。

真実証果といふは、必至滅度の悲願にあらわれたり。証果の悲願、『大經』にのたまはく、「設我得仏、国中人天、不住定聚、必至滅度者、不取正覚」文

これらの本誓悲願を選択本願とまふすなり。この必至滅度の大願をおこしたまひて、この真実信樂をえたる人は、すなわち正定聚のくらゐに住せしめむとちかひたまへり。同本異訳の『無量寿如来会』にのたまはく、「若我成仏、国中有情、若不決定、成等正覚、証大涅槃者、不取菩提」文

この悲願は、すなわち真実信樂をえたる人は決定して等正覚にならしめむとちかひたまへりとなり。等正覚はすなわち正定聚のくらゐなり。等正覚とまふすは、補処の弥勒菩薩とおなじからしめむとちかひたまへるなり。これらの選択本願は、法蔵菩薩の不思議の弘誓なり。しかれば真実信心の念仏者は、『大經』には「次如弥勒(左訓 ついでみろくのごとし)」とのたまへり。これらの大誓願を往相の廻向とまふすとみえたり。弥勒菩薩とおなじといへりと『龍舒淨土文』にはあらわせり。^[註10]

宗祖は、『大經』第 11 願が提示される時には、必ず『如来会』第 11 願を併記するのを常とされている。後述するが、このことは、『一念多念文意』や『未燈鈔』などにも、全く同様に述べられているのを見る。「住定聚 — 必至滅度」が「成等正覚—証大涅槃」という表現になったことは、「正定聚」を「現生」とするとき、「等正覚」もまた「現生」となることを意味している。『大經』は魏訳(曹魏・康僧鎰訳と言われてきたが、実際は、東晋・仏陀跋陀羅と劉宋・法雲の共訳、421 年訳と推定されている)であり、『如来会』は唐訳(唐・菩提流支訳 706-713 年)であるから^[註11]、仏教学的にも『如来会』のほうが新しい翻訳であり、本願が発展しているという意味において、宗祖はおそらく『如来会』のほうを時代の課題に答えた新しい訳とみておられたのではなかろうかと推測される。

『一念多念文意』における(2)証經文証の部分の文章であるが、同様に、『大經』第 11 願に、『如来会』第 11 願を併記するものである。

しかれば、必至滅度の誓願を、『大經』にのたまはく、「設我得仏、国中人天、不住定聚、必至滅度者、不取正覚」と願じたまへり。また『經』にのたまはく、「若我成仏、国中有情、若不決定、成等正覚、証大涅槃者、不取菩提」とちかひたまへり。この願成就を、釈迦如来ときたまはく、「其有衆生、生彼国者、皆悉住於、正定之聚、所以者何、彼仏国中、無諸邪聚、及不定聚」とのたまへり。これらの文のころは、たとひわれ仏をえたらむに、くにのうちの人天、定聚にも住して、かならず滅度にいたらずば、仏にならじとちかひたまへるころなり。またのたまはく、もしわれ仏にならむに、くにのうちの有情、もし決定して等正覚(左訓 まことのほとけになるべきみとなれるなり)をなりて大涅槃(左訓 まことのほとけなり)を証せずば、仏にならじとちかひたまへるなり。かくのごとく、法蔵菩薩ちかひたまへるを、釈迦如来五濁のわれらがためにとき

たまへる文のころは、それ衆生あて、かのくににむまれむとするものは、みなことごとく正定の聚(左訓 かならずほとけになるべきみとなれるとなり)に住す。ゆへはいかんとなれば、かの仏国のうちには、もろもろの邪聚(左訓 じりきざふぎやうざふしゆのひとなり)および、不定聚(左訓 じりきのねむぶちしやなり)はなければなりとのたまへり。この二尊の御のりをみたまへるに、すなわち往生すとのたまへるは、正定聚のくらゐにさだまるを不退転(左訓 ほとけになるまでといふ)に住すとはのたまへるなり。このくらゐにさだまりぬれば、かならず無上大涅槃(左訓 まことのほとけなり)にいたるべき身となるがゆへに、等正覚(左訓 ほとけになるべきみとさだまれるをいふなり)をなるともとき、阿毘跋致(左訓 ほとけになるべきみとなり)にいたるとも、阿惟越致にいたるともきたまふ。即時入必定ともまふすなり。この眞実信樂は、他力横超の金剛心なり。しかれば、念仏のひとおぼ『大經』には「次如弥勒」ときたまへり。弥勒は豎の金剛心の菩薩なり、豎とまふすはたたさまとまふすことばなり。これは聖道自力の難行道の人なり。横はよこさまといふなり。超はこえてといふなり。これは仏の大願業力のふねに乗じぬれば、生死の大海(左訓 ろくどうにまどふをだいかいとたとふる だいかいはうみなり)をよこさまにこえて、眞実報土のきしにつくなり。「次如弥勒」とまふすは、「次」はちかしといふ、つぎにといふ。ちかしといふは、「弥勒」は大涅槃にいたりたまふべきひとなり。このゆへに弥勒のごとしとのたまへり。念仏信心の人も、大涅槃にちかづくとなり。つぎにといふは、釈迦仏のつぎに、五十六億七千万歳をへて、妙覚(左訓 まことのほとけなり)のくらゐにいたり たまふべしとなり。「如」はごとしといふ。ごとしといふは、他力信樂のひとは、このよのうちに不退のくらゐにのぼりて、かならず、大般涅槃のさとりをひらかむこと、弥勒のごとしとなり。^{〔註12〕}

関東のご門弟たちへの教誡は、『末燈鈔』等の消息類においても非常に懇切丁寧であり、信心の人は弥勒に等しいとかの言葉が多く散見される。凡夫が仏になるという未曾有の法は、他力回向のはたらきであって、そのことこそ本当に驚くべきことであって、そのほかのことは、二の次のことであり、眞に求むべきものを求めよと教誡しておられるように思われる文章である。関連する書簡は多数あるが、その代表的なものは、次の書簡である。

信心をえたるひとは、かならず正定聚のくらゐに住するがゆへに等正覚のくらゐとまふすなり。『大無量寿經』には、摂取不捨の利益にさだまるものを正定聚となづけ、『無量寿如来会』には等正覚と説きたまへり。その名こそかはりたれども、正定聚・等正覚は、ひとつところ、ひとつくらゐなり。等正覚とまふすくらゐは補処の弥勒とおなじくらゐなり。弥勒とおなじく、このたび無上覚にいたるべきゆへに、弥勒におなじと説きたまへり。さて『大經』には、「次如弥勒」とはまうすなり。弥勒はすでに仏にちかくましませば、弥勒仏と諸宗のならひはまふすなり。しかれば、弥勒におなじくらゐなれば、正定聚の人は如来とひとしともまうすなり。浄土の眞実信心のひとは、この身こそあさましき不浄造悪の身なれども、心はすでに如来とひとしければ、如来とひとしとまふすこともあるべしとせたまへ。弥勒はすでに無上覚にその心定まりてあるべきにならせたまふによりて、三会のあかつきとまうすなり。浄土眞実のひとも、このころをころうべきなり。光明寺の和尚の『般舟讚』には、信心のひとは、この心すでにつねに浄土に居すと積したまへり。居すといふは、浄土に信心のひとのころつねにゐたりといふころなり。これは弥勒とおなじといふことをまふすなり。これは等正覚を弥勒とおなじと申すによりて、信心のひとは如来とひとしとまふすころなり。

正嘉元年 丁巳 十月十日 親鸞 性信御房 (『末燈鈔』3通目)^{〔註13〕}

「正嘉元年 丁巳」とは、親鸞 85歳の歳である。大変分かりやすい平易な文章であり、きわめて要領よく、「その名こそかはりたれども、正定聚・等正覚は、ひとつところ、ひとつくらゐなり」ということを明かしておられる。

正定聚と等正覚

以上、明らかなように、『如来会』において表われる「成等正覚——証大涅槃」という対応は、『大經』においては「住定聚——必至滅度」という表現となっている。涅槃は滅度と同義である。宗祖の転釈には、涅槃を滅度と同義とされている文が、いくつか見出される。『教行信証』『証卷』に、

正定聚に住するがゆへに、必ず滅度に至る。必ず滅度に至るは、すなわちこれ常樂なり。常樂はすなわちこれ畢竟寂滅なり。寂滅はすなわちこれ無上涅槃なり。^{〔註14〕}

とあり、『唯信鈔文意』にも、

涅槃おぼ滅度といふ、無為といふ、安樂といふ、常樂といふ、実相といふ、法身といふ、法性といふ、眞

如といふ、一如といふ、仏性といふ、仏性すなわち如来なり。この如来微塵世界にみちみちたまえり、すなわち一切群生海の心なり。^[註15]

涅槃は滅度と同義であるが、等正覚と正定聚とは同義と言い得るのであろうか。等正覚は、本来は、如来の十号にも出される如来の別名ではなからうか。『大経』には、次のように、如来の十号が述べられる。

その時に次に仏有しき。世自在王、如来・応供・等正覚・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・仏・世尊と名づけたてまつる。^[註16]

大乘菩薩道の菩薩 52 階位で対照するならば、十信、十住、十行、十回向、十地、等覚、妙覚という次第において、『大経』の「定聚に住し、必ず滅度に至らずは正覚を取らじ」とは、この場合、正定聚の位は、菩薩の不退転地である初歡喜地であると推測されうが、つまり十地の初地 41 位であるが、しかしながら、『如来会』においては、「等正覚を成り、大涅槃を証せずは菩提を取らじ」とあることから、「等正覚＝等覚」とされる宗祖において、これは菩薩 51 位のことであり、それゆえ、補処の弥勒と等しいとされる。菩薩 51 位は「等覚」、52 位は「妙覚」である。51 位「等覚」は「等覚」ではあってもまだ菩薩、52 位「妙覚」は仏の悟りである。『一念多念文意』には、一生補処の弥勒が正覚位で、妙覚位の一位前であることが、述べられている。

「次如弥勒」とまふすは、「次」はちかしといふ、つぎにといふ。ちかしといふは、「弥勒」は大涅槃にいたりたまふべきひとなり。このゆへに、弥勒のごとしのたまへり。念仏信心の人も、大涅槃にちかづくとなり。

つぎにといふは、釈迦仏のつぎに、五十六億七千万歳をへて、妙覚のくらゐにいたりたまふべしとなり。^[註17] 正定聚の位に定まることを、住不退転と言ひ、「等正覚」、「阿毘拔致」、「阿惟越致」、「即時入必定」とも言い換えられている。

この二尊の御のりをみたまへるに、すなわち往生すとのたまへるは、正定聚のくらゐにさだまるを不退転に住すとはのたまへるなり。このくらゐにさだまりぬれば、かならず無上大涅槃にいたるべき身となるがゆへに、等正覚をなるともとき、阿毘拔致にいたるとも、阿惟越致にいたるとも、ときたまふ。即時入必定ともまふすなり。^[註18]

『教行信証』「行巻」には、次のように述べられている。

しかれば真実の行信を獲れば、ここに歡喜多きがゆえに、これを「歡喜地」と名づく。これを初果に喩ふことは、初果の聖者、なほ睡眠し懶墮なれども二十九有に至らず。いかにいはんや十方群生海、この行信に帰命すれば撰取して捨てたまはず。ゆゑに阿弥陀仏と名づけたてまつる。これを他力といふ。ここをもつて龍樹大士は「即時入必定」と曰えり。曇鸞大師は「入正定聚之数」と云えり。^[註19]

大乘菩薩道のうちの十地の初歡喜地＝撰取不捨＝正定聚不退転であることが示されている宗祖の言葉である。同じく『教行信証』「行巻」には、次のように述べられている。

必得往生というは、不退の位に至ることを獲ることを彰すなり。『経』には即得と言へり、『釈』には必定と云へり。

第 11 願文において、『如来会』において表われる「成等正覚——証大涅槃」と『大経』における「住定聚——必至滅度」の対応関係を鋭く洞察された宗祖は、等正覚と正定聚とを同義となして、「この正定聚に住するを等正覚をなるともたまえるなり」と言い切られ、「等正覚とまふすは、すなわち補処の弥勒菩薩とおなじくいとすと、ときたまへり」と述べられてある。弥勒菩薩——弥勒仏という現在——未来との対応関係も明らかにされて、「弥勒はすでに仏にちかくましませば、弥勒仏と諸宗のならひはまふすなり」とあつたように、菩薩であるけれども弥勒仏と言われる。

等正覚と正定聚とを同義となす表現は、次のように、『正像末和讃』などにも随所に見受けられることから考えると、宗祖はこのことを力説しておられたに相違ない。「等正覚」には左訓「しやうちやうしゆ(正定聚)のくらゐなり」とある。

念仏往生の願により 等正覚にいたるひと

すなわち弥勒におなじくて 大般涅槃をさとるべし

真実心うるゆえに すなわち定聚にいりぬれば

補処の弥勒におなじくて 無上覚をさとるなり^[註20]

『教行信証』には、次のように結釈が表現されている。

まことに真に知りぬ。弥勒大士、等覚金剛心を窮むるがゆへに、龍華三会の暁、まさに無上覚位を極むべ

し。念仏衆生は、横超の金剛心を窮むるがゆへに、臨終一念の夕、大般涅槃を超証す。かるがゆへに便同といふなり。しかのみならず金剛心を獲る者は、すなはち韋提と等しく、すなはち喜・悟・信の忍を獲得すべし。これすなはち往相回向の真心徹到するがゆへに、不可思議の本誓によるがゆへなり。^[註21]

真実の報土

『浄土論』に曰く、莊嚴妙声功德成就は、偈に「梵声悟深遠 微妙聞十方」とのたまへるがゆへにと。此れ如何ぞ不思議なるや。經に言たまわく、若し人、ただ彼の国土清浄安樂なるを聞きて、剋念して生まれんと願ずると、また往生を得ると、即ち正定聚に入る、此れは是れ国土の名字、仏事を為す。安んぞ思議すべきや。乃至 莊嚴眷属功德成就は、偈に「如来淨華衆 正覺華化生」と言へるがゆへにと。此れ如何ぞ不思議なるや。おほよそこれ雜生の世界は、もしは胎もしは卵もしは湿もしは化、眷属そこばくなり。苦樂万品なり。雜業をもつてのゆゑに。かの安樂国土は、これ阿弥陀如来の正覺淨華の化生する所にあらざることなし。同一に念仏して別の道なきがゆゑに。遠く通ずるにそれ四海のうちみな兄弟とするなり。眷属無量なり。いづくんぞ思議すべきや。

また言わく、「往生を願ずる者、本は則ち三三之品なれども、今は一二之殊なし。また淄澠 食陵の反し 一味なるが如し。いづくんぞ思議すべきや」已上

また『論』には、く、「莊嚴清浄功德成就は、偈に觀彼世界相 勝過三界道とのたまへるがゆゑにと。これいかんぞ不思議なるや。凡夫人の煩惱成就せるあつて、またかの浄土に生を得るに、三界の繫業畢竟して牽かず。すなはちこれ煩惱を断ぜずして涅槃の分を得。いづくんぞ思議すべきや」。以上抄要

この阿弥陀如来の往相回向の選択本願をみたまつるなり。これを難思議往生とまふす、これをこころえて他力には義なきを義とすとしるべし。

『教行信証』『証卷』においては、『浄土論註』『下卷』から、浄土二十九種莊嚴のうち、妙声功德・主功德・眷属功德・大義門功德・清浄功德からの五文が引用されているが、今この『浄土三經往生文類』では、「乃至」の語をもって主功德の一文が略され、他の四文が記されている。このことは、略本においても、広本においても同様である。「真実の証果」として明らかにされようとしていることは、願文に現れている正定聚と滅度とであり、そのことは、『浄土論註』においては、妙声功德が正定聚、他の四文が滅度として対応している。五文中で、主功德一文がなぜ記されていないのかについて、幡谷明『浄土三經往生文類試解』(P 169)によると、「主功德は、如来の住持力の優れて偉大であることを、眷属である浄土の菩薩の徳用によって讃仰されたものであるが、今ここでは浄土の徳を明らかにするのが主眼であることから省略されたのであろうか」とされているが、主功德を表わす文中には、

もし人ひとたび安樂浄土に生ずれば、後の時に意「三界に生まれて衆生を教化せん」と願じて、浄土の命を捨てて願に随いて生を得て、三界雜生の火の中に生ずといへども、無上菩提の種子、畢竟して朽ちず。何をもつてのゆゑに。正覺阿弥陀の善く住持を徑るをもつてのゆゑにと。

という言葉があることから、第 11 願対応というよりも、むしろ第 22 願の還相回向に対応している言葉であるからとも言えるのではなからうか。『教行信証』『証卷』においては、還相回向の志願をたまわる徳は、浄土において得る徳であることを明らかにしている。『浄土三經往生文類』では、『浄土論註』『下卷』からの四文の提示のち、すぐ後には、「二に還相回向というは」として、『大經』第 22 願の願文が直に出されておられ、『浄土論註』『下卷』主功德の文が出されることはないのであるが。

『浄土論註』『下卷』からの四文は、いずれにおいても、「これいかんぞ不思議なるや」とか、「いづくんぞ思議すべきや」という言葉が頻繁に使われている。「上卷」の觀察門が浄土建立の法蔵の願心を明かすものであり、それが「下卷」においては、人間のはからいをもってしては思議すべからざる願心莊嚴を讃嘆する表現であふれている。思ひはかることができないような、対象化して分析して、人間の知恵の作ってきた比較・優劣・競争の価値観で捉えることを拒絶し、それを越えていくものが、向こうの方から他力回向として起こっていた。法蔵菩薩の清浄願心として表白された本願が、真に人間を人間自身の知恵の価値観から一味平等の自然の大地へ解放せしめんがために、不可称不可説不可思議という否定表現を通して明かにされている。浄土が人間の分別の中に、対象化された存在として取り込みかねないことの拒絶を、このような表現をもって、曇鸞は説示してくれている。

「經に言たまわく、若し人、ただ彼の国土清浄安樂なるを聞きて、剋念して生まれんと願ずると、また往生を得

ると、即ち正定聚に入る」という一文は、出典の経文が対応できないが、曇鸞が作った文ではなく、経典に説かれている願いを、こういう表現をもって曇鸞自身がうなづかされた言葉として記されている文であろうと言われている。『大経』の第十八願成就文と、『教行信証』「行巻」所引の『大阿弥陀経』・『平等覚経』の第十七願文を合採したものであると言われている。

この言葉は、宗祖によって、読みかえされている。普通には、「剋念して生まれんと願すれば、また往生を得て、即ち正定聚に入る」と読まれるべき文であろうが、これでは正定聚が未来になってしまう。宗祖は、今ここで、正定聚に入ることが現生であって、当来ではないことを言おうとされており、「剋念して生まれんと願する」者と、「またすでに往生を得た者も、正定聚に入ることを述べている。このことは、既に指摘されていることであるが、先に示した『一念多念文意』の中に、

この文のころは、もしひと、ひとへにかのくにの清浄安楽なるをききて、剋念してむまれむとねがふひとと、またすでに往生をえたるひとすなわち正定聚にいるなり。^[註22]

と語られ、宗祖自身の言葉でこのように語られている。ここの「剋念して」には、「えてといふ」と左訓されている。「信を得て」ということであり、「かのくにの清浄安楽なるをききて」という聞は即ち信であるからである。

『教行信証』「証巻」にも経文証として挙げられている願成就文であるが、先に挙げた『如来会』の第11願成就文には、同様の表現が見うけられる。

また言わく、彼の国の衆生、若しは当に生まれん者、皆悉く無上菩提を究竟し涅槃処に到らしめん。

『一念多念文意』の対応文(3)証釈文証に相当する文章は以下のようである。

『浄土論』曰。「経言、若人但聞彼国土、清浄安楽、剋念願生、亦得往生、即入正定聚、此是国土、名字、為仏事、安可思議」とのたまへり。この文のころは、もしひと、ひとへにかのくにの清浄安楽なるをききて、剋念(左訓 えてといふ)してむまれむとねがふひとと、またすでに往生をえたるひとと、すなわち正定聚にいるなり。これはこれ、かのくにの名字をきくに、さだめて仏事をなす、いづくんぞ思議(左訓 おもひはかるべからずといふ ころもおよばずことばもおよばれず しるべしとなり)すべきやとのたまへるなり。安楽浄土の不可称・不可説(左訓 ときつくすべからずとなり)・不可思議の徳を、もとめず、しらざるに信ずる人にえしむとするべしとなり。

また王日休(左訓 しむたんこくのひとなり)のいはく、「念仏衆生、便同弥勒」といへり。「念仏衆生」は、金剛の信心をえたる人なり。「便」は、すなわちといふ、たよりといふ。信心の方便によりて、すなわち正定聚のくらるに任せしめたまふがゆへにとなり。「同」は、おなじきなりといふ。念仏の人は、無上涅槃にいたること、弥勒におなじきひととまふすなり。^[註23]

『一念多念文意』の対応文を3分割して、『浄土三経往生文類』(広本)所説に従って、その相当箇所にも長く引用したが、大変意味深い表現があり、真実の行信証に関する肝要が、関東の門弟たちへの教説として語られている文章である。「いづくんぞ思議すべきや」のうち、「思議」の語には左訓があり、「おもひはかるべからずといふ ころもおよばずことばもおよばれず しるべしとなり」とある。およそ人間的な営みのすべてが、思慮分別も心も言葉もおよばれずという、人間の努力から隔絶された無為自然は、自力無効をくぐらなければ、決して明かにはならない、世間とは非連続な出世間である。「かのくにの名字をきくに、さだめて仏事をなす」とはどういうことかという、本文には、「安楽浄土の不可称・不可説・不可思議の徳を、もとめず、しらざるに信ずるひとにえしむとするべしとなり」ということであると述べられている。ひとえに他力回向であるゆえに、求めては得られず、分かることとするをも離れた自力無効の処に、はじめて安楽浄土の不可称・不可説・不可思議の徳がこの身に得しめられてくる。

仏事をなすとは、衆生教化をなすことである。聞くということが、即、信ずることとなることは、聞即信ということは、先に引用した中に、

「聞其名号」といふは、本願の名号をきくとのたまへるなり。きくといふは、本願をききてうたがふころなきを、聞といふなり。またきくといふは、信心をあらわす御のりなり。^[註24]

と述べられていた。

また言わく、「往生を願する者、本は則ち三三之品なれども、今は一二之殊なし。また溜漚[シジョウ]食陵の反しの一味なるが如し。いづくんぞ思議すべきや」已上

これは大義門功德の文であるが、願往生者は、本願信受の機が定まらない内は、『観経』所説の九品往生の如く

であるが、本願信受の機が定まった今は、往生に優劣の区別なく、一味平等の本願海に救済されるべき者となる。同一が成り立つのは、生まれや能力などの個人差に関係なく、念仏申すことだけが一味平等にたすかる道である。溜川[シセン]と澗川[ジョウセン]は違う川であるが、海に入ると一味になるがごとしという。このような往生のことは、凡夫のはからいを越えている。その後、王日休の「念仏衆生 便同弥勒」(龍舒浄土文)の文が出され語義解釈されて、この一段が終わるが、この『一念多念文意』の文章構成は、『浄土三経往生文類』とほとんど同一であるのは、同時期に執筆されたがゆえに、当然のことであると考えられる。宗祖には、同じ時期に、『如来二種回向文』という仮名聖教もあり、そこにもほぼ同様の論旨が述べられていることは、前述したとおりである。

『浄土三経往生文類』(広本)を、宗祖の『教行信証』および仮名聖教類を対照しつつ述べてきて、既に予定した字数が尽きようとしているので、「正定聚」、「等正覚」、「弥勒と等し」などを述べる消息類と和讃に関して、そして、「還相回向」「双樹林下往生」「難思往生」のついても、続編として別の機会に述べさせていただきたく思う。

註

- 註1 『定本親鸞聖人全集』(以下『定親全』と略記)第一巻, 138頁, 2008年, 法蔵館
- 註2 『定親全』第三巻和文篇, 127-128頁
- 註3 『定親全』第三巻和文篇, 131頁
- 註4 『定親全』第二巻漢文篇, 13頁
- 註5 『定親全』第三巻和文篇, 119-120頁
- 註6 『定親全』第三巻和文篇, 84頁
- 註7 『定親全』第二巻和讃篇, 172頁
- 註8 『定親全』第三巻和文篇, 217-218頁
- 註9 『定親全』第三巻和文篇, 126-128頁
- 註10 『定親全』第三巻和文篇, 218-219頁
- 註11 藤田宏達博士『浄土三部経の研究』, 36頁, 2007年, 岩波書店
- 註12 『定親全』第三巻和文篇, 128-131頁
- 註13 『定親全』第三巻書簡編, 68-70頁
- 註14 『定親全』第一巻, 195頁
- 註15 『定親本』第三巻和文篇, 170-171頁
- 註16 『真宗聖教全書』一, 三経七祖部, 5-6頁
- 註17 『定親全』第三巻和文篇, 130-131頁
- 註18 『定親全』第三巻和文篇, 129-130頁
- 註19 『定親全』第一巻, 67-68頁
- 註20 『定親全』第二巻和讃篇, 171-172頁
- 註21 『定親全』第一巻, 151頁
- 註22 『定親全』第三巻和文篇, 131頁
- 註23 『定親全』第三巻和文篇, 131-132頁
- 註24 『定親全』第三巻和文篇, 126頁